
魔法使いのいない国 第二部

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いのいない国 第二部

【Nコード】

N0957A

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

魔法使い侵入禁止の国に、風変わりな魔法使いダリルとお供のカラスがやって来た。魔法使いだとばれたら死刑になってしまう。この国を立ち去ろうとするダリルだが、思わぬことから魔法使いだと分かってしまう…詳しくは「魔法使いのいない国第一部」をお読み下さいね。

第一話（前書き）

第二部の始まりです！これからストーリーはどんどん展開していく
だろう？と思います。

第一話

早起きの小鳥たちが窓辺で飛び交っている。日は昇ったばかり。窓からは穏やかな朝日が射し込んでいる。エリーは眠い目をこすりながら、大きくのびをした。顔を洗って着替えを済ませたが、まだ頭はぼんやりとしている。

「昨日はしゃぎすぎたみたい…」

昨夜ダリルと箒飛行をして、丘の上で踊り明かした。宿屋に帰って来たのは夜明け前、ついさっきのことだった。夢見心地の飛行とダンス、まるで夢の中の出来事だったような気がする。

（今日でダリルともお別れね…）

現実には夢のようにはいかない。昨夜のことは素敵な思い出として、ずっと心に刻んでおこうとエリーは思った。あくびを抑えながらエリーが下に下りていくと、サムが居酒屋のテーブルにミルクを置いて、カラスに飲ませているところだった。エリーはゆっくりとサムに近寄って行き、肩を軽く叩いた。椅子に座っているサムは振り返ってエリーを見上げる。

「おはよう、サム」

「おはよう」

「本当にミルクが好きなカラスね」

カラスは夢中になって、カップの中のミルクをくちばしで飲んでいる

「あなたのご主人様もミルクがお好きなようだけど」

いつもミルクばかり注文しているダリルをふと思い出し、エリーは可笑しかった。

「ダリルとカラスくんは、いつもいっしょでなかよしだね」

サムがカラスに話しかけると、カラスはミルクを飲むのを中断し、サムを見てかあと鳴いた。

「ぼくもどうぶつのもだちがほしいなあ…」

サムがカラスの頭を指でなでると、カラスは気持ち良さそうに喉をゴロゴロならした。（サム、市場に出かけましょうか？）

その様子を見ながら、エリーは心の中でサムに問いかけてみた。気持ちを集中させて、念じるように……。が、サムは全く気づかず、カラスと戯れている。

（ダメね……もっと修行をつまなきゃ……）

エリーは軽く吐息をつく。

「エリーどうしたの？」

突っ立ったままのエリーを不審に思っ、サムは振り向いた。

「何でもない。市場に行きましょう」

第一話（後書き）

読んで下さってありがとうございます。無事完結するよう頑張りますので、長い目で見守っていてくださいね。（^^;）

第二話

昼前になって、ようやくダリルは起きてきた。既にエリーは市場から戻り、ダリルの客室以外の掃除も済ませていた。

「とても遅いお目覚めね」

エリーの叔母に宿代を払った後、店の方へ歩いてきたダリルに声をかけた。

「魔法使いの生活は夜明けまで続くんだよ。朝は体を休めとかなないとね」

ダリルは、いつも座っている店の隅の席に腰を下ろした。その様子を見て、エリーは厨房に歩いて行く。

「カラス君はどこへ行ったのかな？」

「サムと一緒に出ていったわ。もうすぐ帰って来るんじゃないかしら」

厨房から声をかける。

「ふーん、このところほったらかしだから、怒っているのかもしれないな」

「そうね、近頃サムとよく遊んでいたし」

エリーはダリルのテーブルの方へ歩いて来ると、温かいミルクをそっと差し出した。「どうぞ。お発ちのお客様にサービスします」

「？今日は珍しく優しいね」

ダリルはフツと笑うと、湯気の立っているミルクを美味しそうに口にした。

「今日のミルクは今までで最高の味だね。君の魔法が効いているのかな？」

「魔法なんて…」

笑って答えようとしたエリーだが、ダリルと目が合うと不意に涙が溢れそうになった。短い間のダリルとの思い出が、頭の中をよぎる。エリーはくるりと後ろを向いた。

「使ってる訳ないじゃない…」

涙が一筋頬を伝って流れた。エリーは慌てて指で涙を拭う。

「もしまたこの国に立ち寄ることがあれば、『旅の宿』にお泊まり下さい…」

やっこの思いでエリーはそう言った。もう二度とダリルに会うことはないだろう。抑えきれない涙が次々と溢れてきた。エリーはダリルに背を向けたままテーブルを離れた。

厨房の隅で涙を拭っているエリーの元に、突然羽の生えたハンカチが飛んできた。エリーはビクツとして辺りを見回し、ハンカチを掴んだ。叔母夫婦は料理に夢中で気づいてなかった。エリーの手中でハンカチがバタバタもがいている。

（ダリルのバカ！叔母さん達に見つかったらどうするのよ！）

（怒っている君も魅力的だけど、泣いてる君はもっと魅力的だね）

ダリルの心の声が聞こえ、エリーは厨房からそっとテーブルのダリルを見た。ダリルはエリーを見て微笑んでいる。

（この国はとても気に入った。きつとまた戻って来るよ）

「……」

エリーは羽のついたハンカチで頬の涙を拭くと、微笑みを浮かべた。

第三話

その頃、サムは街を流れる川沿いの道を歩いていた。サムの上空にはカラスが気流に乗って気持ち良さそうに飛んでいる。しばらく行くと、大きな太鼓橋が架かっていた。サムのお気に入りの場所だった。

サムは持ってきた小枝の束を橋の隅に置き、その中から二本の枝を手を取った。

（どっちが勝つかな？）

サムがいつも遊んでいる小枝のレースだ。橋の片方から同時に二本の小枝を落とすと、急いでもう片方の欄干から川を覗き込む。しばらくすると、川の流れに乗って小枝が現れる。二つの小枝は、ほぼ同時に到着した。

（引き分けた。もう一回やろう！）

サムは息を切らせながら、もう一度反対側に走って行った。また小枝の束から二つを選び川に落とそうとした時、サムの足に何かが触れた。足元を見下ろすと、小さな子猫がサムの足を手でつついていた。子猫は鳴いていたが、鳴き声はサムには聞こえない。

子猫は次に小枝の束をつつくと、枝をかじった。

（お腹がすいてるの？）

サムはかがんで子猫を見つめた。と、急に子猫は上空を見上げて鳴いたかと思うと、一目散に走り出した。空を見ると、カラスがサムの元に下りてこようとしていた。

（あれは僕の友達のカラス君だよ！）

サムは子猫を追いかけた。子猫は橋を通り抜け、川沿いの道を走り続けた。小さいがとてもすばしこい。サムはやつとの思いで追いかけた。

「まって！あぶないよ！」

サムは声に出して叫ぶが、子猫には通じない。道を歩く人々の間

をぬって駆けていくと、反対側から速度を上げた馬車が走って来た。
「あぶない！」

馬車にひかれそうになる子猫を見て叫ぶ。子猫はかろうじて馬車の車輪をよけたが、よけた弾みに勢いあまって川に落ちていった。サムが立ち止まって川を覗くと、子猫はもがきながら川の流れに飲まれていた。

「こねちゃん！」

見る見る流されていく子猫を見て、サムは考える間もなく川に飛び込んでいた。川が深く流れが早いことは頭になかった。流されながらも、サムは必死に泳いで子猫を捕まえた。もがく子猫をサムはしっかりと抱きしめた。

（良かった！助かった）

ほっと安心した時、サムは川の深さに気づいた。サムの背では足はつかない。サム自身もどんどん流されていく。沈みそうになる体をどうにか持ち堪え、サムは必死で泳いだ。初めて恐怖が襲ってくる。

「たすけて！！」

サムは大声で叫んだ。サムの上空では、カラスがカアカアと鳴いていた。

第四話

居酒屋のテーブルでダリルがミルクを飲み干した時、店の外で鋭いカラスの鳴き声が聞こえてきた。グラスを置くと、ダリルはスツと立ち上がった。

「どうしたの？」

尋常でないカラスの鳴き声を聞き、エリーが心配そうに厨房から出てきた。

「シッ…」

ダリルは口到人差し指をあてると、無言で外に出ていった。エリーも後に続く。

ダリルの姿を見つけたカラスは、急降下するとダリルの肩に着陸した。ダリルに話しかけるように小さく鳴き続けるカラスの声を、ダリルは一心に聞いていた。

「ねえ、ダリル……」

潤んだエリーの瞳が、不安で一層潤む。

「馬を借りるよ。サムが川に落ちて流されているらしい」

「えっ?!…」

話す間も惜しんでダリルは馬小屋に急ぐ。驚きのあまり言葉を失ったエリーは、その場に立ちつくした。ほどなく馬に乗ったダリルがエリーの元に現れた。

「大丈夫、まだ間に合うさ」

ダリルはエリーに手を差し伸べた。

「おいで、サムは君を待っている」

泣き出しそうになる気持ちを抑えて、エリーはダリルの手に捕まり馬に乗った。

「急ごう、馬に速さの魔法をかけるから落とされないようにね」

ダリルは微笑むと手綱を引いた。魔法のかかった馬の足は、猛スピードを上げて走り出す。風景が、矢のように後ろに飛び去る。強

い向い風を受けながら、エリーは必死の思いでダリルにしがみついていた。

「たすけて…」

泳ぎ疲れたサムは声も出なくなり、何度も溺れそうになる。サムの腕の中では子猫が弱く鳴いていた。サムは子猫を沈めないよう、力を振り絞って片手で水をかいた。

「子供だ！子供が溺れている！」

川沿いの街頭では、川に流されているサムに気づいた人々が集まり始めていた。

「大変！沈みそうよ！」

「誰か助けてあげて！」

浮き沈みするサムの姿を見て人々は心配するが、流れの急な川に飛び込んで助ける勇気はなかった。川の流れは、大人でも飲み込んでしまいそうだ。

その時、街頭をお城の騎士達の一行が馬で歩いて来た。偶然の訪問に人々は歓声を上げる。

「子供が溺れている！助けてやってくれ！」

「お願いします！沈みかけているわ」

通りかかった人々は、騎士達の回りに詰めかけた。騎士達の中には、ジョージの姿もあった。

「サム？…」

川で溺れている子供がサムだと気づいたジョージは、一人馬を前に進めた。

第五話

ビュンビュンと風を切り、空を飛ぶような速度で駆けてきた馬は、ダリルとエリーを乗せてサムの元に到着した。あまりにも足の速い馬に驚く人々の間をぬって、エリーは川縁に進み出た。

「サムーッ！！」

今にも川に沈みそうなサムの姿を見て、エリーは悲鳴に近い声を上げた。

「エリー…」

馬に乗ったジョージがエリーの元に現れた。

「ジョージ…」

ジョージの姿を見て緊張の糸が切れたエリーは、ワアッと手で顔を覆って泣いた。

「助けて…お願い…助けて」

「…ロープだ。誰かロープを持っていないか?!」

ジョージは兵士達の方に向き直り叫んだ。

「これがあります!」

兵士の一人が巻き付けたロープを手にして進み出た。

「それでは間に合わない」

その様子を見ていたダリルは、皆の前に歩み出た。川の中で必死に泳いでいるサムは、浮き沈みしている。ダリルは被っていた黒い帽子を脱ぐと、目をつむって呪文を唱え始めた。

「…ダリル!」

エリーは、はっとして目を見張った。

（ダメ!みんなの前で魔法を使っちゃダメ…）

ダリルの銀色の髪が光りに反射してキラキラ光る。眠っている時間でさえ帽子は脱がなかったから、ダリルの髪をまともに見たのは初めてだった。この国では見たことのない銀色の髪の毛…。

ダリルは呪文を唱え終わると、帽子を川に放り投げた。大きく円

を描くように飛んでいく帽子。その帽子は見る見る大きくなっていった。人々は驚いて呆然としている。

（サム！帽子の船に乗るんだ）

サムの元に飛んでいった帽子は、小舟のように大きくなって川に浮かんだ。ぷかぷかと川に浮かぶ帽子の船にサムはビックリした。

（さあ早く！その船は絶対沈まないよ）

ダリルの心の声を聞いて、サムは恐る恐る帽子の縁につかまりよじ登った。そして子猫と一緒にストンと帽子の底に転がった。中はふわふわしたソファのように柔らかだった。サムは子猫をしつかりと抱きかかえて立ち上がると、帽子の中から顔を覗かせた。

「ダリルありがとう！」

笑顔で手を振るサムの姿を見て、ダリルは微笑んだ。

第五話（後書き）

読んで下さってありがとうございます。ダリルの髪は銀色だったんですね（今更かも）：（^^；）

第六話

人々が固唾を呑んで見守る中、大きな帽子の船は、ダリルの手招きでゆっくりと岸辺に近づいてきた。帽子が着岸すると、サムは子猫をしっかりと抱えて帽子から這い出てきた。

「サム！」

エリーはサムの元に走り寄り、両手でしっかりと小さな弟を抱きしめた。

「死ぬほど心配したんだから！なんで川に落ちるのよ……」

エリーはサムの頭に顔を押しつけて泣いた。

「ごめんなさい！およぐのはとくだから、こねこをたすけられるとおもった」

サムもエリーの胸の中で泣き出した。サムの腕の中では、子猫がミャアミャアと小さく鳴いている。

「サムも子猫もずぶ濡れだな。風邪をひくといけない」

そばで様子を見守っていたダリルは、帽子の船に向かってもう一度呪文を唱えた。と、帽子はふわりと宙に浮かび、くるくると回転し始めた。大きな帽子から強い風が起こり、見る見るサムと子猫の体を乾かしていく。帽子から吹いてくる風は暖かったが、竜巻のような強風は人々を飛ばしそうな程の威力があった。サムもエリーも回りの人々も、必死で体を踏ん張らないといけなかった。

やがて、帽子自体も雫を飛ばして乾くと、ゆっくりと回転を止め段々小さくなっていった。そして、元の大きさに戻るとふわふわと揺れながら、ダリルの頭の上に帰って行った。

全てが元に戻り、ひと騒動が終わると、人々の間からざわめきが起こり始めた。人々の関心は、サムからダリルへ移っていた。サムを救ったダリルなのだが、人々は恐ろしいものでも見るような眼差しで、ダリルを見つめていた。

「あれは魔法じゃないのか？……」

「あの人は魔法使いなの？」

「魔法使いがこの国へ来た……」

ざわめきは、段々と大きくなっていく。

「さて、そろそろ帰ろうか」

当のダリルは周りのことなど気にするそぶりもなく、空をあおいだ。上空ではカラスが飛んでいる。ダリルがカラスに向かって指笛を吹いた時、コツコツと一頭の白馬がダリルの前に歩み出た。白馬の上からはジョージが複雑な表情でダリルを見下ろしていた。

第七話

カラスはゆっくりと空から舞い降りてきて、ダリルの肩にちょこんと乗るとカアと一声鳴いた。人々は一層気味悪がり、ざわめきの波が揺れる。

「：ダリル、とか言いましたね。一つお聞きしてよろしいですか？」
ジョージは静かに口を開いた。ダリルはちらりとジョージに目をやる。

「何なりどうぞ」

ダリルは大げさに深々とおじぎをした。

「国境の立て札の文字を消したのは、あなたですか？」

「ジョージ！」

ダリルが答える前に、エリーはジョージとダリルの間に飛び出した。

「お願い、何も聞かないで。ダリルは今からこの国を出ていくの。だから：見逃してあげて：」

エリーは馬上のジョージを見上げて懇願した。

「：エリー、君は何も知らずに彼を泊めたただけだ。君達には何の罪もない」

ジョージは集まっている人々にも聞こえるように、そう言った。

「……」

魔法使いだと知っておきながらかくまえば、重い罪が科せられる。

「君達は何も知らなかったのだから」

「でも：でも、ダリルはサムを助けてくれた。ジョージ、あなたの病気だってダリルが治してくれたのよ」

「それは：魔法で治療するとは思わなかったから。エリー、この国で魔法を使えばどうなるか分かっているだろう」

「そんなこと分かってる！でも、ダリルは何も悪くないわ。何故咎められるの？魔法を使うことのどこが悪いの！？」

エリーはジョージに詰め寄った。

（エリー黙って！）

突然、エリーの心にダリルの声が響いた。エリーは、はっとしてダリルに目をやる。

（君の勇気には感謝するが、事が大きくなる。ここはジョージに従った方がいい）

（でも…）

エリーは心配気な眼差しをダリルに向ける。

（大丈夫。僕が偉大な魔法使いだと言うことをお忘れかい？）

ダリルはフツと笑い、目配せした。そして、ジョージの元に歩み寄った。

「確かに、立て札の文字を消したのは僕だ」

人々のざわめきが一層大きくなる。

「ここは騒がしい。話はゆっくりお城ですることにしよう。一度城の中に入って見たかったのですね」

「…では、一緒に来ていただこうか」

ジョージ達一行は、ダリルを馬に乗せると、その手綱を引きながら静かに城に向かう。大きく膨れあがった人々の群は、遠巻きにその様子を見守った。

「ダリル！！」

サムは泣きながらダリル達の後を追った。

「サム！ダメよ！」

エリーは慌てて走り寄りサムの体を掴んだ。ダリルは振り返ると、サムに軽く手を振った。

（僕がいない間、カラス君の世話を頼むよ。その子猫もね）

カラスはダリルの肩から飛び立ち、一行を見送るように上空で旋回した。涙で泣き濡れたサムは、子猫をしっかりと抱きしめてダリルの姿が見えなくなるまで立ちつくしていた。

第八話

ダリルが魔法使いだという噂は、あつという間に国中に広まった。今やそのことを知らない人々はいない。魔法使いが国に侵入すれば死刑になる。やや退屈なくらい平和に過ごして来た人々には、刺激的な話題だった。見慣れぬ「魔法使い」の恐怖と興味が入り混じり、皆の話題はダリルのことで持ちきりだった。

「あのお客が魔法使いだったとはな…」

「来た時から気味が悪かったのよ。全身真っ黒な服着てカラスを連れてるなんて」

「もし魔法使いを泊めていることが知れたら、罰せられるところだったな」

「本当に…今日宿代もらったけど、本物のお金かどうかあやしいもんだわ」

疲れ切ったエリーとサムが宿屋に戻って来ると、叔父と叔母もダリルのことを話していた。

「エリー、サム！無事だったかい？話は聞いたよ。大変な目に遭ったんだってね」

「魔法使いは捕まって、お城に連れて行かれたそうだな」

「良かったね。これで安心だ、魔法使いなんて君が悪い」

「…ダリルは、川に落ちたサムを助けてくれたのよ。ダリルがいなければサムはどうなってたか…」

エリーに肩を抱かれたサムは、うつむいたまま肩を震わせている。

「ぼくのせいでダリルがつれていかれた…ダリルはころされるの？…」

「サムのせいじゃないわ。ダリルは大丈夫だから…今度は私たちがダリルを助けてあげましょう」

「エリー！何言ってるの！？相手は魔法使いなんだよ」

「そうさ、魔法使いを知っていたというだけでも罪になるんだ！馬

鹿なこと言うんじゃない！」

叔父と叔母はエリーの発言に驚きを表す。

「まほうつかいはどうしてわるいの？ まほうはどうしていけないの？」

サムは泣きそうな顔をして、叔父と叔母を見上げる。

「お前はまだ知らないだけさ！ 魔法は人を殺すことだって出来るんだからね」

「ダリルはそんな事しないわ。叔父さんも叔母さんも知らないだけよ。魔法を使うことは悪くないわ！」

「エリー！」

と、サムの腕の中の子猫がミャアミャアと鳴いて、サムの腕から飛び降りた。お腹を空かせた子猫は、厨房から漂ってくる良い香りに引きつけられていた。

「こら！ ダメだよ、中に入っちゃ！」

叔母の怒鳴り声も気にせず、子猫は厨房の中に駆けていった。

「おなががすいてるんだ。なにかたべさせてあげて」

そう言って、サムは子猫の後を追いかけた。

「エリー、いいかい、魔法使いに関わることは許さないよ。そんなことをしたら、ここを出ていってもらわないと……」

後について行こうとしたエリーに、叔母は声をかけた。

「……」

エリーはその言葉をかみしめ、黙って歩いて行った。

第九話

その日の夜更け。

サムは子猫をしつかりと抱いてベッドで眠っていた。お腹のいっぱいになった子猫も安心しきってサムの胸の中で眠っている。窓から降りそそぐ月明かりの中で、サムと子猫のあどけない寝顔を見て、エリーは微笑みを浮かべた。この日始めて笑った気がした。慌ただしく過ぎ去った一日、やっとほんとに安心出来た。しかし、叔母の言葉を思い出すと、エリーの笑みは消えていく。

叔母夫婦は多少きついところはあるけれど、両親の亡くなったエリーとサムを引き取って育ててくれた。今では本当の両親のように思っている。その叔母に、魔法使いに関われば家を出て行くようにと言われた事は、ショックだった。

エリーは軽くため息をつくとき、サムのベッドから離れ窓辺にたたずんだ。空にはいつもと変わらない月が浮かび、星が瞬いている。月明かりに照らされた街並みは、静かに眠りにについている。何もかも平和そのものだった。

（ダリルはどうしてるかしら？…）

エリーの胸に不安がよぎる。本当なら既にこの国を去っていたはずだった。ダリルとの別れは辛い、今となってはもっと早くダリルに去ってもらえば良かったと後悔している。

（どうしたらいいの？…私に何が出来る？…）

夜空に問いかけてみる。

（このまま魔法のことは忘れてしまう？ダリルのことを見殺しにするの？…）

星達は何も言わず、優しく瞬いていた。

（そんなこと出来ない）

例えここを出ていくことになっても、国王に罰せられることになっても、何もせず見過ごすことは出来ない。誰一人味方になっ

くれなくても、ダリルを助けたい。夜空の星々に、エリーは強く誓った。

と、空の遠くからカラスの鳴き声が聞こえてきた。

「ダリルのカラス？」

カラスはダリルが捕らえられた後、ずっと姿を消していた。主人を失ったカラスは、一人宿屋へと戻ってきた。部屋窓辺に舞い降りてきたカラスを、エリーは中に入れる。カラスはかあと小さく鳴くと、羽ばたきながら椅子の背に止まった。

「ダリルが戻ってくるまで、この部屋にいたいわ」

不気味だったカラスも、今では愛おしく感じるようになっていた。ダリルの分身であるカラスが戻ってきたことで、エリーは幾分心強くなった。

「待ってて、あなたの好きなミルクを入れて来るから」

エリーは微笑むと部屋を出ていった。

第十話

机の上のホットミルクを、カラスは美味しそうにゴクゴクと飲んだ。カップにくちばしを入れては出して、見る見るカップは空になっていく。

「よっぽどお腹が空いていたのね」

エリーは目を丸くして、カラスを見つめた。大きくて真っ黒な鳥。今までじっくり観察したことはなかった。気味の悪さが消えた訳ではないけれど、つぶらな瞳でじっとエリーを見つめる様子は愛らしかった。

「ダリルがいなくて寂しい？」

答える代わりにカラスはエリーに近寄り、机の上に乗せていたエリーの手をつついた。

「フフ、くすぐったい」

エリーは優しくカラスの頭をなでる。意外にも柔らかくて温かい毛並みだった。カラスは気持ち良さそうに目をつぶった。

「そろそろ休まなきゃ」

エリーはカラスをなでる手を止める。

「：明日、お城に行ってみるわ」

何かを決心したように呟くエリーを、カラスはじっと見つめた。

「王様に直接会うのは無理かもしれないけど、ダリルのことを許して貰えるよう説得してみる。魔法は悪いことじゃなくて、人を救うことも出来るんだって解ってもらおうわ」

エリーは立ち上がると、ドレスのボタンを外しネグリジェに着替えようとした。

「あなたももうお休みなさい。ダリルの部屋みたいに、ベッドの端に止まって寝て良いわよ」

さっきからじっと自分を見つめているカラスに、エリーは言った。「どうかしたの？」

カラスの視線は、エリーの胸元にくぎ付けになっている。ボタンを外そうとしたエリーの手がふと止まる。

（ただのカラスよね？…でも、じっと見られていると嫌な感じだわ）
エリーは口元を弛めながらも、カラスに背を向けた。と、パタパタと後ろで羽音がした。

（カラスにはお構いなく、着替えを続けて良いよ）
「！…えっ？…」

突然心に響いてきた聞き慣れた声に、エリーの心臓は止まりそうになる。

「ダリル！？」

驚いて振り向いたエリーの後ろには、目をくりくりさせたカラスがいるだけだった。カラスは大きく羽を広げると、カアカアと鳴いた。

（カラスになってみるのも悪くないね）

「ダリルなの！？」

いつものダリルの笑い声が心に響き、エリーは慌てて胸元を押さえた。

第十一話

カラスのダリルは羽ばたくと、机の上からベッドの端へと移動した。

（鳥になって飛ぶのも気持ち良い。何より君がずっと優しくなるからね）

エリーはドレスのボタンをかけ直し、むっとした表情を浮かべる。
「カラスになってるなら早く言つてよ！…でも、あなたの体はどうなってるの？」

（お城の牢屋の中さ。今はカラス君が僕の体に入っている）

「カラスが？…大丈夫なの？」

（今は眠っているから、牢屋番も気づかないだろう。ま、カラス君は賢いから、人の姿で空を飛ぼうとはしないさ）

ダリルの笑い声がエリーには聞こえるが、目の前にいるのはカラス。エリーは不思議な気持ちになる。

「あなたは本当にダリルなの？…なんだか信じられない…」

（城から抜け出すためには、何かに姿を変えなければならない。牢屋の上部には小さな小窓がついていたのでね、カラス君に来て貰ったんだ。入れ替わりの魔法は簡単だよ）

カラスになったダリルは、バタバタと羽を羽ばたかせた。

（だが、危険も伴う。カラスの姿で獣や人間に襲われたら命取りになる。…まだ信じられないのかな？）

まじまじと見つめるエリーを、カラスの姿のダリルは小首を傾げて見上げた。

（それなら、もう一度僕の体に触ってくちばしにキスしてくれたら分かるよ）

エリーの頬がサツと赤くなる。

「！…もう充分分かったわ。あなたはいつものカラスじゃないもの。危うく着替えるところだったじゃない」

ダリルの笑い声がエリーの心に響く。

「…でも、良かった。あなたが無事だと分かって…明日、あなたを助けにお城に行くわ」

（それは止めた方がいいな。危険が大きすぎる）

カラスは、エリーをじっと見つめた。

（城の様子では、僕はすぐには処刑されないようだ。魔法使いが珍しいらしく、色々調べたいらしいな。ま、それが終わって用済みになれば、処刑されるだろうが）

「じゃ、どうすればいいの？黙って処刑を見過ごすなんて、私には出来ない！」

（…もう少し調べてみるよ。城にはリシリーという大臣がいたが、彼が大きなカギを握っているような気がする。彼の心を探ろうとしても何も探れない。とても大きな力を感じた）

「リシリー大臣？…」

（彼を探ってみるから始めれば良い）

「分かった…お城にはジョージが勤めているから、ジョージに聞いてみるわ」

（それから、君はもっと魔法の勉強をするんだ）

「…魔法の？」

（僕が見込んだとおり、君には魔法使いの才能がある。君にはカラスになった僕と一緒に行動してもらわないと困る。魔法が使えると何かと便利だからね）

「…分かったわ。やってみる」

エリーの決心は固まった。心の中は大きな不安でいっぱいだったが、ダリルの言葉でそれを上回る勇気が湧いてきた。ダリルを救うため、この国を変えるため、エリーは困難に立ち向かう決心をした。（今夜はそろそろ帰るよ。明日の夜また来る）

カラスは羽ばたくと、窓辺に向かった。

「ダリル、気をつけて」

（君もね。魔法使いのことは忘れたふりをしていればいい。それか

ら、本物のカラス君が帰って来たら、ホットミルクを飲ませてあげておくれ)

カラスは夜空に向かって、窓から飛び立った。

(今夜のミルクも最高に美味しかったよ)

見送るエリーの心に、ダリルの声が響いた。

第十二話

穏やかな朝日が窓から降りそそぐ。高い空からは鳥たちのさえずりが聞こえ、街道からは荷馬車の車輪の音と馬の足音が聞こえ始めた。昨日の出来事は忘れてしまったかのような、いつも通りの平和な一日が始まる。

「エリー、エリー」

ベッドから起きたばかりのサムは、机の上に身を伏せて眠っている姉の肩を揺すった。

「…うん?…」

眩しい朝日に目を細めながら、エリーはゆっくりと身を起こした。まだ、頭はぼんやりとしている。

「もう七じだよ」

「え?…」

あくびをしながら掛け時計に目をやると、時計の針は七時過ぎを差していた。

「大変!…」

エリーは慌てて椅子から立ち上がった。昨夜、カラスの姿のダリルが帰った後、ずっと「魔法の本」を読んでいたのだ。どうやらそのまま眠っていたらしい。

「きのうは、ねむらなかつたの?」

「うん…本を読んでたら、そのまま眠ったみたい」

エリーは微笑むと、サムに見せないように「魔法の本」を机の引き出しにしまった。

「さつき、カラスくんがかえってきたよ。カラスくんはダリルといっしょだったのかな?」

嬉しそうに話すサムの後ろに、カラスがベッドの端に止まっているのが見えた。

「カラス?…」

エリーはカラスの側に寄り、じつくりと眺めた。真っ黒でつぶらな瞳のカラス。

「あなたは、カラスよね?…」

カラスは小首を傾げながら、カアと小さく鳴いた。

「どうしたの?」

穴のあくほどカラスをじっと見つめているエリーを、サムは不思議に思う。

「何でもない…いつものカラス君みたいだわ」

「カラスくんとこねこにミルクをあげていい?」

サムのベッドの上には子猫がちよこんと乗って、カラスを警戒しながら見ていた。

「こねこもミルクがだいすきなんだ」

「いいわよ」

「ダリルもミルクがすきだよ。ダリルはおしろでのめたかな?」

サムの目が、ふと心配そうに曇る。エリーは後ろから優しくサムを抱きしめた。

「大丈夫。ダリルはきつとミルクを飲んでるわ」

「ほんとに?」

「……?」

エリーは、はっとしてサムを振り向かせた。

「ねえ、今、私の声聞こえたの?サム、後ろ向いてたでしょ?」

「?…ほんとだ。でも、ぼくエリーのいうことわかったよ。ダリルのこころのこえみたいだった…」

サムは目を丸くしてエリーを見つめた。

「もう一回言ってみるわ」

エリーはくるっと後ろを向いてサムに背を向けた。

「サム、私の声が聞こえる?」

「……?」

サムはエリーの背中を叩いた。

「なにもきこえない」

振り返ったエリーにサムは答えた。

「そう：もっと集中しなきゃダメみたいね」

「でもすごいや！エリーもダリルみたいなことができるんだね！」

「もっともっと練習したらね。でも、このことは秘密よ。ダリルを助けるまで誰にも言わないで」

「うん！ダリルがたすかるまで」

第十三話

その頃、自分の姿に戻ったダリルは、狭く薄暗い牢屋の中にいた。壁の上に小さく開いた窓から、わずかな光りが注ぎ青空が覗いている。牢屋の前には二人の牢屋番が見張っている。昼間は窮屈な牢屋にいたらないダリルは、壁に背をもたせかけてウトウトとまどろんでいた。

そこへ、コツコツと響く複数の足音が聞こえてきた。足音は段々と近くなり、牢屋の前で止まった。ダリルが眠い目を開けてみると、そこにはリシリー大臣とその後ろにジョージの姿があった。ジョージはぼつの悪そうな、戸惑いの表情をしてダリルを見ている。

「昨夜はよく眠れたかね？」

ジョージとは対照的に、リシリーは堂々とした態度でダリルをじっと見ていた。

「…この堅いベッドでは快適な眠りは無理だが、充分体を休めることは出来た」

ダリルも負けずにリシリーを見返す。

「フム、なかなか度胸のある若者だ。魔法使いと言った方がいいかな？」

「どちらでも、お好きなように」

二人のピリピリした会話に冷や冷やししながら、ジョージは後ろで見守っていた。

「では、魔法使いダリル、二、三質問があるのだが宜しいかね？」

「何なりどうぞ」

（聞き難いことなら、心で思うだけでいい）

ダリルはリシリーの冷ややかな目を見つめながら、心で言った。

「難しいことは聞かない。口で答えてもらえるかね？」

リシリーはダリルの声を無視して、ピシヤリと言った。

「この国へ立ち寄ったのは何故かね？」

「僕は旅の途中の身。たまたまこの国にたどり着いたから、立ち寄ったまでだ」

「立ち寄るさい、立て札は見なかったのかな？君が魔法で消したという立て札だが」

リシリーは冷たい目をして、フツと笑った。

「もちろん目にしたが、ここを通らず遠回りするのは面倒だったからね。それにこの国には何か惹きつけられるものを感じた。多分、魔法を禁じているところだと思う」

そう言って、ダリルは微笑んだ。

「……」

ジョージは何か言いたげに身を乗り出すが、言葉は出てこなかった。

（ジョージ、君は心配しなくていい。これは僕一人の問題だ）

突然、心の中にダリルの声を聞いたジョージは驚いて目を見開いた。

（言いたいことは心で思えばいい。リシリーには聞こえないはずだ）
だが、ダリルは感じていた。リシリーは他人どおしの心の会話さえ分かっているのだと…。

第十四話

（ダリル、あなたの立場はかなり悪い状況にあります。反抗的な態度は慎んだ方が良くと思います。私の力ではどうすることも…）

ジョージはリシリーを気にしながら、ダリルに思いを答えた。と、リシリーが振り向いてジョージを一瞥した。ジョージはビクツとして身体を固くする。

（リシリー様には聞こえないはずでは…？）

ダリルは何も言わず、黙ったままリシリーを見つめていた。

「君たちは知り合いなのかね？」

リシリーは穏やかに、だが視線は鋭く口を開いた。

「いえ…」

ジョージは困惑した表情を浮かべ、口ごもる。

「この国に来て一、二度会っただけだ。その程度でも知り合いというのかな？ もちろん、彼は僕が魔法使いであることは知らなかった」
ダリルはリシリーから視線を外さず、落ち着いて答えた。牽制するように飛び交う視線。重い空気が流れる。

と、沈黙を破るように、牢屋に別の足音が響いてきた。一人の騎士が現れ、リシリーとジョージに会釈した。ジョージはひとまずほっとする。

「エリーという娘が城の門前に来ております。ジョージ・サンダーソン様に会いたいと申しています」

「エリーが？」

「君の婚約者という娘かね？」

リシリーは口元を弛める。

「いえ…婚約者の友人です」

「ふむ、結婚までには身辺整理を済ませておいた方が良いでしょう。後々面倒なことになるといけないからな」

「そういう関係ではありません」

ジョージの頬が染まるのを見て、リシリーは軽く笑った。

「まあ良い、会いに行ってやりなさい。魔法使い殿の話は、また後で聞くことにしよう」

「はい…」

ジョージはリシリーに一礼すると、呼びに来た騎士と共に去っていった。

（お前のような新米の魔法使いは、考えもなくやたらと魔法を使いたがる。それが身の破滅になることを思い知っておくが良い）

立ち去り際、リシリーはダリルの心に強く語りかけてきた。

「……」

リシリーの後ろ姿を見つめながら、ダリルはフーツと息をついた。

第十五話

城へと続く橋のたもとで、エリーはそわそわしながらジョージを待っていた。この前はサムのことやダリルのことで気が動転していて、何の抵抗もなくジョージと話せた。と言うより、状況が切羽詰まっていたから、躊躇している場合ではなかった。

だが、今はまた心が揺れている。

（落ち着いて、普通に話せばいいだけよ。何でもないことだわ）

エリーは自分に言い聞かせると、大きく深呼吸した。気持ちを落ち着かせたエリーだが、門から出てくるジョージの姿を見た時には、また心臓の鼓動が早くなっていた。

ジョージはためらいがちに、門から掘りに架かる橋を渡って歩いて来た。

「おはよう、ジョージ」

エリーは笑顔を作って話しかけた。

「仕事中呼び出してごめんなさい。あなたに少し聞きたいことがあるの」

「：ダリルを捕らえることになってしまっでごめん。この国に魔法使いが来ることは許されないから：ダリルを助けたいけれど、僕の手ではどうすることも…」

「ジョージが謝ることはないわ。ダリルはこの国の法律を破ったんだもの：罰せられても仕方ないわ。私も何度もこの国を出るように勧めたのよ。なのに、全然出ていこうとしないんだから」

「：だけど…」

ジョージは、さばさばとしたエリーの口調に戸惑う。

「君は、ダリルがこのまま処刑されてもいいのかい？…」

「：処刑されるのは残酷だと思う。：でも、夕べ一晩よく考えたの。ダリルは良い人だったけど、やっぱり国の法律を破るのは良くないって。だから、ジョージが責任を感じることはないわ」

「……」

沈黙のままジョージに見つめられ、エリーの心臓は早鐘より早くうち続ける。

（どうしよう……こんな時心で会話が出来たらいいのに……でも、ジョージの気持ちも全然読めないし……）

エリーはゴクリとつばを飲み込む。

「……あ、あの、それで話なんだけど……一度、リシリー大臣に会わせていただくことは出来ないかしら？」

「……リシリー様に？」

ジョージはエリーの意外な質問に目を見張る。

「君が何故？」

「……あの、リリィがこの前相談に来たのよ、お城の騎士達の間で流行病にかかっている人が多いって、本当はダリルに治療してもらったつもりだったけど、今は出来ないから……私の薬草で治療出来ないかと思ったの。この前ジョージに作った薬草の煎じ薬より、もっと良い薬を作るから、そのことでリシリー様とお話がしたくて……ジョージから話してみてもらえないかしら？」

それだけ一気に話して、エリーは一息ついた。

「確かに、最近奇妙な病気が流行っているね。君の煎じ薬で治療出来るなら助かるよ」

「リシリー様は私と会って下さるかしら？」

「僕から話してみる」

「良かった」

エリーは、ほっと胸をなで下ろした。

「……僕はてっきり君がダリルを解放してくれるよう頼みに来たのかと思った……」

ジョージの真っ直ぐな眼差しに、エリーは罪悪感を覚える。

「本当は、ダリルが僕を治療したように、ダリルに治療してもらえたらいいのだけど」

「……」

(ジョージ、ごめんなさい…)
それ以上何も言えなくて、エリーは心の中で何度も謝った。

第十六話

その日の夜遅く。

エリーは部屋の机の前に座り、魔法の杖を握りしめ目の前にあるティーカップを一心に見つめていた。神経を集中させて呪文を唱える。小さなランプの明かりが、ゆらゆらと揺れてティーカップの影を揺らしている。

ティーカップは、じつと机の上に乗っていた。エリーは瞳を閉じると、もう一度呪文を唱え始めた。しばらくすると、カップがカタカタと小さく振動し始める。エリーは杖に集中して、なおも呪文を唱えた。と、カップが勢いよくサーツと動いた。エリーはすぐに別の呪文を唱えたが、勢いあまったカップはテーブルの端を飛び越え床に落下してしまった。ガチャンツという音とともに、カップは二つに割れた。

「ダメね。コントロール出来ない…」

エリーは割れたカップを見つめて、ため息をついた。何度も何度も練習して、ようやく物の移動は出来るようになったが、まだ思うように動かすことが出来なかった。

時計の針は午前一時を回っていた。エリーは椅子から立ち上がる。

「ダリル、遅いわね」

カラスはダリルを迎えに出向いていた。今夜もカラスと姿を交換したダリルが訪れるはずだが、なかなか帰って来なかった。

「もう一度やってみようかな。今度は壊れない物にするわ」

エリーはティーカップの破片をそっと拾った。

その頃、ダリルは城の牢でカラスの到着を待っていた。上を見上げて小さな窓を眺める。

（カラス君、遅いな…）

もうそろそろ来ても良い頃だ。視線を落とすと、牢屋の前には牢屋番が一人ダリルに背を向けて見張っていた。牢屋番が見張るのは牢屋の前で、まさか小さな窓からダリルが出入り出来るとは思っていなかった。ダリルは牢屋番の方に近づいた。

「今夜は君一人かい？もう一人の番人はどうした？」

突然ダリルに声をかけられ、牢屋番はビクリとして振り向いた。「体調を崩してさっき帰って行った。：もうすぐ代わりの者が来るはずだ」

牢屋番はダリルを見て警戒した。魔法使い相手に一人では心許ない。

「ふん…」

ダリルは壁にもたれて腕組みした。

「たちの悪い病気が流行りはじめてきたな」

「もう休みなさい。罪人と口を聞くことは許されてない」

牢屋番は内心の恐れを悟られないよう、口調を強めて言った。その様子を見てダリルはフツと笑うと、片隅のベッドに腰を下ろした。それからしばらくした頃。

（お前が待っているものは、今夜は来ない）

突然、ダリルの心の中に強い声が響いてきた。牢屋の外に目を向けても、そこには牢屋番以外誰もいなかった。

（リシリーなのか？：カラスをどうした？）

ダリルは心で問う。

（心配することはない。朝まで眠らせているだけだ。牢屋の窓から出入りされては困るからな）

リシリーの静かな笑い声が心に響く。

第十七話

（私の姿を探しても見つかりはしない。離れた城の部屋にいるのだからな）

ベッドから立ち上がり、辺りをキョロキョロ見回しているダリルに、リシリーの声は言った。

（こちらからは牢屋の様子は手に取るように分かるのだがね）

ダリルはゆっくりとベッドに腰を下ろし、腕組みした。

（：そういう事が出来るのは、魔法使いだけだ。僕の他にもう一人魔法使いがいるようだな）

（そんな事は、とっくに分かっていたのだろうか？）

（この国は、『魔法使い侵入禁止』ではなかったのか？）

（私がこの国に来てからはな）

リシリーの声は鼻で笑う。

（それ以前は、そのような法律はなかった。：ダリル、お前はまだ若く未熟だ。この先も魔法の修行がしたいのなら、命だけは助けてやろう。黙ってここを出ていくがいい。皆の記憶からはお前のことを全て消し去っておく）

（……）

ダリルは腕組みしたまま、黙り込む。リシリーに悟られないよう、心を空白にして目をつぶった。

（：それは出来ない）

しばらくして、ダリルは心で語った。

（このまま立ち去るつもりだったが、今は立ち去ることは出来ないな。この国には、不吉な影が迫って来ようとしている。リシリー、あなたも気づいているだろう？以前の流行病よりも強力な病が広まりつつある。この国は滅びてしまうかもしれない……）

（お前の力で何が出来る？：そう言えば、エリーという娘が流行病に効く煎じ薬を作ったと言っておったな。私に会いたいとのことだ）

ダリルは目を開いた。

（お前はあんな小娘を使って私の邪魔をしようとしているのか？）
リシリーの声は可笑しそうに笑う。

（…彼女に会うつもりなのか？）

（フン、薬の効き目を試してみてもいいだろう。娘が何をしでかすか観察してみるのも面白い。明日にでも使いの者を送って娘に会うつもりだ。それがお前の望みだろうか？）

（……）

（まあ、一晩よく考えてみることもだな。たかが一国のために、魔法使いの道を閉ざすのがいいか、このまま修行の旅を続けるのがいいか、決めるのはお前だ）

（……）

リシリーの声は、含み笑いと共に静かに闇の中に消えていった。

しばらく黙ったまま考え込んでいたダリルは、ふと立ち上がり牢屋番の方に近づいて行った。

「すまない、水をもらえるかい？」

牢の前でうとうとしかけていた牢屋番は、ビクツと身を縮ませて振り向いた。

「水を飲ませてくれないか？」

驚いた顔の牢屋番に、ダリルは微笑んでそう言った。

第十八話

エリーの頭の奥で「ドンドン」という鈍い音が聞こえた気がした。今夜も机に突っ伏したままいつの間にか眠ってしまった。音は何度か聞こえたが、エリーの眠りをさえぎるまでには至らない。エリーはムニャムニャと小さく呟き、顔の向きを変えて眠り続けた。

そのうち音も止んだ。夜明け前の部屋は薄暗く、小さくなったランプの明かりがユラユラと揺れていた。静まりかえった部屋には、エリーの安らかな寝息が聞こえるだけだ。と、ふいにコツンという何かが壁に当たる音がした。そして、ガンッ！という鋭い音がエリーのすぐ近くで聞こえた。眠り込んでいたエリーも、さすがにその大きな音で目を覚ました。

「何？」

眠い目をこすりながら身を起すと、椅子のすぐ側に小石が落ちていた。カラスが来るのを待って窓を開けていたから、石は窓から投げ込まれたのだろう。エリーが不思議に思っていると、もう一度窓から小石が飛んできて床に砕け散った。

「誰よ!？」

椅子から立ち上がり窓辺に駆け寄る。エリーが窓から外を見下ろすと、裏庭に見知らぬ騎士が立っていた。彼はもう一度石を投げようとしている。

「誰？そこで何してるの!」

恐い気持ちを抑えながら、声を上げる。騎士は小石を投げ捨てると、エリーを見て微笑んだ。

「ようやくお目覚めかい？起こすのに苦労したよ」

「あなた誰!」

（分からないのか？ダリルだよ。仮の姿では魔法も使えないからね）
（ダリル?…）

（声を張り上げるのはまずいから、心で話そう）

エリーは不思議そうに、見知らぬ騎士の姿を見つめる。心に聞こえる声は、いつものダリルの声だった。

（訳あってカラス君に変身出来なかった。城の牢屋番の身体を借りている。すぐに戻らないといけないから、手短に話そう。明日、リシリーは君に会うよう使いの者を送ってくるはずだ）

（ジョージが話してくれたんだわ）

（僕もカラスの姿で側にいようと思っていたが、それが出来なかった。君は一人でリシリーと会うことになる。リシリーは君の魂胆を知っているから気をつけるんだ）

（：私一人で）

エリーは不安になる。

（葉だけ届けて、すぐに帰った方がいいな。：リシリーは魔法使いだ。それかなり力のある：）

「リシリー大臣が！？」

エリーは驚いて、思わず大声を出した。

（リシリーのことを探るには、慎重に行動した方がいい）

（リシリー様が魔法使いだなんて、信じられない：）

（では、帰るよ。明日は葉を届けるだけで何もなくていい。充分気をつけるんだ）

牢屋番の姿をしたダリルは、エリーに向かって投げキッスをする。

「では、お嬢さん夢の続きをご覧ください」

そして足早に闇の中を去っていった。

「：リシリー様が魔法使い：」

エリーはしばらく呆然として、夜の闇を見つめていた。

牢屋番の姿で、城の牢屋に戻ったダリルは、牢の中のベットにぐったり横たわっている自分の姿を見つめた。牢屋番が水を渡す瞬間その手を掴み、身体を入れ替わった。そして、自分の身体を殴って気絶させていたのだった。リシリーの魔法のバリアがあるせいかな、

呪文があまり効かず乱暴なことをしなければならなかった。

(殴ったところが痛まなければいいが…)

そう考えているダリルの元に、病で倒れた牢屋番の代わりの騎士がやってきた。

「魔法使いは眠っているのかね？」

「そのようだね」

ダリルは牢屋番になりすまし、落ち着いて答える。しばらくすると、ダリルの姿をした牢屋番が意識を取り戻し、起きあがった。牢屋番は自分の姿を牢の外に見て驚きの声を上げる。

「どういうことだ！？何故私が魔法使いになってる！」

牢屋番のダリルは、興奮しながら鉄格子の側に詰め寄ってきた。

「何を言ってるんだね？」

もう一人の牢屋番は不審な顔をする。

「狭い牢屋に閉じこめて、おかしくなってきたのかもしれないな」

本物のダリルは、ずっと牢屋番のダリルの手を掴むと意識を集中させて呪文を念じた。ほどなく、ダリルは自分の身体の中に戻っていった。戻ったと同時に自分が殴ったみぞおち辺りが痛んだ。

「私は牢屋番だ！」

興奮気味の牢屋番は、元に戻ったことも忘れて叫んでいた。

「当たり前だろう。おかしなことを言うな」

「……??」

もう一人の牢屋番にたしなめられた牢屋番は、キョトンとした顔をしていた。

「こんな狭くて暗い場所にいると、おかしくなってくるものなんだよ」

ダリルはフツと笑うと、みぞおちをさすりながらベッドに横になった。

第十八話（後書き）

いつも読んで下さってありがとうございます。ラストに向けて頑張
って書いてます。無事完結出来るよう、続けていきます。かなり長
くなってきましたね…（^^;）

第十九話

朝が訪れた。夜明け前から小雨が降り続き、日が昇っても外は薄暗かった。エリーが目覚めた時、サムベッドは空だった。いつもなら寝坊したエリーを起こしてくれるサムだが、今日は先に部屋を出たらしい。寝不足が続く、ぼんやりした頭で窓の外を見つめる。どんよりと曇った空は、エリーの心を写しているようだった。

（リシリー大臣が魔法使い…）

昨夜、ダリルから聞いた言葉が重くのしかかっていた。そして今日、そのリシリーと一人で会うことを考えると、不安は一層つのる。その時、窓の外からカラスの鳴き声が聞こえてきた。ベッドから起きあがり窓辺から覗いてみると、裏庭の木にカラスがとまっていた。カラスはエリーの姿を見つけると、カアカアと羽を広げて鳴いた。いつもより元気がないように感じる。エリーは窓を開け、雨に濡れたカラスを部屋に招き入れた。

「あなたは、ダリルじゃないわよね？…」

椅子の背に止まったカラスに、淡い期待をかけて問いかけてみるが、カラスはキョトンとした様子で首を傾げるだけだった。

（ダリルがカラスに変身出来ないのも、リシリー様の魔法のせいなのか？…ダリルも太刀打ちできないような魔力が、リシリー様にはあるのかしら…その力を使ってこの国を支配しようとしているの？…）

良くない考えが次々浮かび、エリーの心は不安でいっぱいになる。その時、

「エリー！エリー！」

不安をもっと大きくさせるようなサムの大声が聞こえ、部屋のドアが勢いよく開いた。サムは青ざめた泣きそうな顔をして、立ちつくしている。

「どうしたの？…」

「おばさんが、おばさんがたおれた！」

「！……」

エリーはサムと一緒に部屋を飛び出した。

叔母は叔父に抱えられて、部屋のベッドに寝かされていた。額に汗をかき、苦しそうにうなっている。

「流行りの病だ……もう何人も病気で倒れている」

叔父は心配そうな顔をして、側の椅子に腰を下ろした。エリーは冷やしたタオルを持って来て、優しく叔母の額を拭いた。

「もうダメだよ……薬なんて効かないんだから。苦しみぬいて皆死んでいくんだ……」

叔母はうつろな目をしてエリーを見つめた。エリーは微笑む。

「大丈夫よ。叔母さんは元気なんだから、すぐに良くなるわ」

「気休めなんていらないよ……自分のことは良く分かるんだから……5年前の流行病よりたちが悪そうだ……あの時は助かったけど、今度は……」

「今度は私の薬草があるから……きっとみんな助かるわ」

叔母は力無く首を振った。

「サム！……あっちにお行き。病気がうつるよ」

おびえた目をして側に突っ立っていたサムは、慌てて部屋を出ていった。

「あんたも、エリーも、出ていっておくれ……」

叔母はそれだけ言うと、苦しそうに目をつむった。

「……」

エリーの口元から笑みが消え、何も言うことが出来なかった。

（ダメ……みんなを救うわ。誰も死なせはしないから……）

エリーは叔母の手を握り、心に誓った。

第二十話

雨は昼を過ぎても止まなかった。雨に煙る街並みは、暗く沈んで見える。リシリーがさし向けた馬車に乗り、エリーは城へと向かっていた。人通りのまばらな通りに、エリーは葬儀の列を見た。黒い姿の人々の沈んだ群れ。その重い雰囲気は、街の暗さを一層象徴していた。

（また、お葬式だわ…）

流行病が広まってきてから、葬儀の列をよく目にするようになった。為すすべもなく、死んでいく人々…。活気のあった街は、日増しに生気を無くしていく。

エリーが城に向かっていた頃、牢屋のダリルはベッドに寝ころび、牢の薄暗い天井をぼんやりと眺めていた。外は小雨が降り、牢の中は一層ジメジメとしていた。

（もうすぐ城に着く頃かな？…）

ダリルは懷から小さな水晶球を取り出した。手のひらに乗せ、じっと見つめて呪文を唱える。

（やはり、ダメか…）

ダリルは小さく息を吐く。いつもなら、澄んだ水晶球に見たい場面が浮かんでくるはずだった。だが、リシリーの魔法が邪魔しているせいか、水晶球には何も映らない。リシリーと会うエリーのこと気がかりだった。

と、牢屋番の一人が苦しそうな咳をした。ダリルは身を起こして、目を向ける。

「大丈夫か？」

もう一人の牢屋番に声をかけられるが、咳はなかなかおさまらない様子だった。

「…たちの悪い風邪のせいさ…もう何人もの騎士達が倒れている…」

彼はようやくそれだけ言うと、また咳き込んだ。

（城の中にも病が広がってきたようだ。早く手を打たないと…）

ダリルは水晶球を懷にしまい込みベッドに横になると、精神を集中するように目をつむった。

城に到着したエリーは、家臣の案内で広く美しい部屋へ通された。「リシリー様をお呼びして参ります。しばらくお待ち下さい」

家臣はそう言って部屋を後にし、エリーはただっ広い部屋に一人残された。城の中に入るのは、もちろん初めてのことだった。優雅なソファとテーブル、壁に飾られた大きな絵画、華やかな花瓶に生けられた溢れんばかりの花々、頭上高くきらめく美しいシャンデリア…。どこを見渡してもエリーの日常とはかけ離れた品々が目に入ってきた。

エリーの心に不安の波が押し寄せる。見知らぬ国にたった一人で訪れた異国人のような心境だった。そして、これから会うのは力ある魔法使い…。

（落ち着いて…）

エリーは深呼吸して高まる不安を抑えた。と、その時、部屋にノックの音が響き、扉がゆっくりと開いた。エリーが緊張して振り返ると、そこには穏やかな笑みを浮かべたりシリーが立っていた。

第二十一話

「ジョージの友人だというお嬢さんですね。どうぞ、おかけ下さい。ゆっくり話を聞きましょう」

リシリーはエリーに椅子を勧めると、ソファに腰を下ろした。

「…あの、今朝叔母が倒れて、すぐに帰らないといけないんです。薬草の煎じ薬を作る時間ありませんでした…」

エリーはソファには座らず、立ったまま答えた。

「それは大変ですね。あなたが作った薬を飲めば、叔母様の具合も良くなるかもしれない」

「……」

（嘘だわ。そんな事思ってもいないくせに…）

エリーは黙ったままりシリーを見つめた。リシリーは表情を崩さず微笑んでいる。

「城の内部でも、流行病が広まってきています。あなたの薬がたくさん必要になりそうですね」

リシリーはそう言うと、ソファから立ち上がった。

「また、この次にでも薬を届けてください。門番にでも渡すといいでしょう」

「……」

「それでは、今日は失礼致します」

軽く一礼して去っていきこうとするリシリーを、エリーは悲痛な表情で見つめた。

「…待ってください！それじゃ間に合わない…私の薬では、誰も助からないわ…」

「……」

リシリーは足を止め、振り返った。

「お嬢さんの薬草は、大変良く効くと聞いていましたか？…」

「ダメよ！この病はどんな薬も効かないわ。あなたも分かっている

はずでしょう？このままではみんな死んでしまう…」

エリーは崩れそうになる気持ちを必死で抑えた。

「…魔法の力がなければ。魔法の力を借りなければ病気は治らないわ」

「……」

リシリーは黙ったままエリーを見つめた。

「魔法使いダリルの力が必要という訳ですか？」

身体を震わせ、泣きそうな顔をしたエリーに、リシリーは冷ややかな笑みを向けた。

「…はい」

エリーは小さく答える。

「それは無理な願いです。彼はいずれ死刑となる身。この国では魔法は禁止されています」

「お願いします！魔法の力が必要なんです。この国を助けて…」

「魔法を使うことは許されない。これは国王の命令です」

「…この国がなくなっても構わないんですか？あなたは平気なの？あなた一人助かるつもり？」

「お嬢さん、話はもう終わりました。もうお帰りなさい」

リシリーは冷たい目でエリーを見つめる。

「お願い…あなたの力が必要なんです…」

「……」

「ダリルとあなたの力があれば…」

「何を言っている？」

リシリーは恐ろしい目をしてエリーを睨んだ。

「これ以上何か言えば、あなたの命も保障できなくなりますよ」

「……」

リシリーは乱暴に扉を開けると、足早に部屋を出ていった。エリーはリシリーの威厳に圧倒され、もう何も言うことが出来なかった。

第二十二話

エリーは沈んだ気持ちで城を後にした。そぼ降る雨は止みそうにない。エリーの沈んだ心のように、街は重く暗かった。

（：どうすればいいんだろう？：どうすればこの国を救えるの？：）
自分に問いかけてみても、良い考えは何も浮かんでこなかった。

（もうダメ：私一人では何も出来ない：）

宿屋に帰り扉を開けると、子猫が小さく鳴いて足元にすり寄って来た。叔母が倒れ、居酒屋も宿屋も今日は締め切っている。例えば店を開けたとしても、来るお客は誰もいないだろう。

「どうしたの？お腹空いた？」

エリーをじっと見上げる子猫をそっと抱き上げた。子猫は、何か言いたげにエリーを見つめて鳴き続ける。

「待って、今ミルクを持って来るから」

子猫は突然エリーの腕から飛び降りると、サッと厨房の方に駆けて行った。何か不吉な気配を感じたエリーは、子猫を追って厨房に入る。

「サム！」

かまどの前の床にサムが倒れていた。エリーは慌てて駆け寄る。

「サム！：」

エリーはサムを抱き起こし、頬ずりした。サムはぐったりして、その身体は炎のように熱かった。

「：嫌、嫌だサム：しっかりして：」

堪えきれずに涙が溢れ出て、エリーは泣き崩れた。

（みんな、みんな病気になるっていく：みんな死んでしまうの？：）

「：エリー：」

サムは薄く目を開け、やっこの思いでエリーの背中に手を回した。
「エリー：」

（泣かないで：僕は大丈夫だよ。僕は死なない：エリーも病気がう

つるから、離れた方がいいよ)

「……」

エリーはサムから顔を離し、じっとサムの顔を見つめた。サムは目をつむり、苦しげな呼吸をしている。今、はっきりとサムの声を心で聞いた。小さな身体で必死に病氣と闘っているサムの姿を見て、エリーの心に熱いものがこみ上げてきた。

(サム、大丈夫よ、私が助けてあげるから。みんな助けてあげるから)

エリーが心で話しかけると、サムは答える代わりにエリーの背中に回した手に力を込めた。エリーは、サムをしっかりと抱きかかえ、厨房を出ていった。

第二十三話

私にもきつと出来る。思いが強ければ、信じる力が大きければ、願いはきつと叶うはず…。ベッドに横たわったサムの手を、エリーは両手で包み込むように握った。

ダリルの力もリシリーの力も得られないのなら、自分が魔法を使うしかない。エリーは思った。成功する可能性が少ないとしても、今は自分を信じるしかない。

苦しそうに瞳を閉じているサムの手をそっと元に戻し、エリーは魔法の杖を手にした。目を瞑り、杖に神経を集中させて、静かに呪文を唱える。夕闇がせまり、薄暗くなり始めた部屋の中で、エリーは一心に呪文を唱えた。

サムの荒い息づかいだけが聞こえる静かな部屋。ベッドの傍らでは、カラスと子猫もじっとその様子を見守っていた。

（お父さん、お母さん、まだサムを連れて行かないで…神様、私に力を下さい）

エリーは心に強く願い、魔法の杖を握りしめた。

その頃城の牢の中で、ダリルは小さな窓から空を眺めていた。厚い雲に覆われた空に夜の闇が訪れようとしている。暗闇は、この国の未来を象徴しているようだ。

（偉大な魔法使いになる道は険しいな…一つの国を救う力も僕にはないのだろうか？）

ダリルは軽く息を吐き、懐の水晶球を取り出してみた。リシリーの魔法のバリアのために、何も映らなかった水晶球。もう一度、両手の手のひらに乗せて、じっと見つめる。透明な球は、白い霞がかかったようにぼやけて見えた。神経を集中させ、体中の「気」を集めて静かに呪文を唱える。一心に願いを込めて。

と、白く濁っていた水晶球が、霧が晴れてくるように透明になり

始めてきた。

（リシリーの魔力が弱ったか？…）

ダリルは、さらに集中して呪文を唱え続けた。やがて、水晶球はある光景を鮮明に映しだしてきた。それを見て、ダリルは驚きの表情を表す。

（偉大な魔法使いになどなる必要はないのかもしれないな…強い願いがあれば、誰でも魔法使いになれるのかもしれない。彼女は、手ごわいライバルになりそうだ…）

ダリルは水晶球を見つめながら、微笑んだ。透明な水晶球の中には、魔法の杖を握りしめて一心に魔法を唱えるエリーの姿がはつきりと映っていた。

水晶球に映る光景を見つめながら、球を通して伝わってくるエリーの呪文に合わせて、ダリルも呪文を唱えた。見る見る水晶球は透明さを増し、光り輝いていく。ダリルはエリーに届くように水晶の中に念を込めて、呪文を唱え続けた。

第二十三話（後書き）

いつも読んで下さってありがとうございます。ストーリーも大詰めです。ラストスパートします。（^^;）ちよつとずつしか書けなくてごめんなさい。m（＿）＿m

第二十四話

どれくらいの時が立ったのだろうか？いつしかエリーは魔法の杖を握りしめたまま、サムのベッドにもたれ掛かって眠っていた。

（いけない…寝ちゃった…）

ここ数日慌ただしく過ぎていき、ろくに眠っていないかった。眠い目をこすり、サムの顔を覗き込む。サムは規則正しい穏やかな寝息を立てて、ぐっすりと眠っていた。熱も下がっているようだ。

（良かった！…）

エリーの顔に喜びと安堵の表情が表れる。何度も魔法の呪文を唱えているうちに、途中から段々と心が軽くなっていったような気がした。呪文が唱えやすくなるというか、後押しされるような温かな力を感じていた。それが、ダリルの力だとは気づいていないエリーだが、魔法の力でサムの病を治せたことは、エリーに大きな自信と勇気を与えた。

（魔法が効いた。私にも魔法が使えたわ。叔母さんも治してあげなきゃ）

勢いよく立ち上がったエリーは、突然激しい目眩に襲われた。クラクラしてその場にしゃがみ込む。ダリルがジョージを治療した時も、ダリルはひどく疲れていたようだった。大きな魔法を使うと、それだけ消耗する力も大きいのかもしれない。エリーはしばらくじっとしたまま、目眩がおさまるのを待った。

（…いきなりは無理よね。でも、時間がないわ…）

どうにか目眩が静まり窓の外に目を向けると、厚い雲に覆われた空が段々と白み始めていた。と、「ニャー」という声が足元で聞こえた。子猫がエリーにすりより、鳴きながらエリーを見上げている。ベッドの脇にはカラスが静かに止まってエリーを見ていた。

「待ってて、今温かいミルクを持って来るから」

カラスと子猫の存在は、エリーにとって心強い。少なくとも一人

ぼっちではない気がしてきて、幾分元気が出てきた。エリーはゆつくりと立ち上がった。

エリーが皿とグラスにミルクを入れて部屋に戻ろうとした時、店の扉をドンドンと叩く音がした。

（こんな夜明け前に誰だろう？…）

扉は何度も叩かれ、何か緊迫した気配を感じた。エリーはミルクを乗せたトレイをテーブルに置くと、急いで扉の鍵を開けた。

「ジョージ、リリィ…?!」

扉の外にはジョージとリリィの姿があった。二人とも沈痛な表情をしてエリーを見つめている。

「…どうしたの？…」

また、不吉な影が心に差す。聞かなくとも、悪い知らせであることは間違いない。

「…国王が病気で倒れた…」

ジョージは重い口を開いた。

「……」

エリーの心に差し掛けた希望の光は、再び消えていきそうになる。

第二十五話

「私のお父様とお母様も病気になったの…みんな次々と病で倒れていくわ。お医者様も病気になって、診て貰える人さえいなくなつた。亡くなる方が多すぎて、葬儀も出来ないと聞いたわ…」

リリイは目を潤ませエリーを見つめる。

「私もいつ病気になるか…」

「リリイ…」

今にもくずおれそうなリリイの体を、ジョージはそつと抱き寄せた。

「エリー、今となつては、もう魔法の力に頼るしかないような気がする。勝手な願いだとは承知しているけれど、ダリル以外この国を救ってくれる人はいないと思うんだ」

「ジョージを魔法で治療したように、あの方ならきつとみんなの病気を治してくださるわ。だから、あの方を解放してくださるよう、リシリー様をお願いしようと思うの」

「…そうね」

黙って話をきいていたエリーは静かに頷いた。昨日はきつぱりと拒絶された願いだが、国王まで倒れた今、リシリーは考え直してくれるかもしれない。それとも、国王の存在がなくなりこの国を支配することが、リシリーの真の願いなのだろうか？そう思いたくはないが、エリーの心は不安で揺れる。

「エリー、大丈夫？ なんだか顔色が良くないわ…」

いつもの元気がないエリーをリリイは心配する。

「大丈夫よ、ちょっと寝不足なだけだから…リシリー様に会いにお城に行きましょう。きつと分かってくださるわ」

不安な気持ちを追い払うように、エリーは微笑んだ。

国王が病に倒れたためか、城は悲しみに沈んでいるように活気が

なかった。そのせいばかりではなく、病気になった家臣達も多く実際城の人々の数は大分減っていた。

昨日エリーが案内された部屋に、今日はジョージとリリイと一緒に通された。間もなくして、足早にリシリーが入って来た。その姿を見て、ジョージは軽くお辞儀をする。

「国王がご病気になられたことは知っておるだろう？あまり時間はとれないよ」

リシリーはエリーと視線を交わす。

「昨日のお嬢さんもおいになったのかね？…話をするのはもう何もないと思うが…」

「…いいえ、もう一度お願いに参りました。何度だって来ます。国王が病気になられた今、魔法を使わなければこの国は滅んでしまいます！」

エリーはリシリーの冷たい視線を感じながらも、必死に懇願した。

「…ジョージ、君もこのお嬢さんと同じ意見なのかね？」

「…はい…」

ジョージは躊躇しながら、口を開いた。

「法を犯すことは分かっています。私はどんな罰を受ける覚悟も出ています。…魔法で皆の命を救うことが出来るのなら、この国を救えるのなら、自分の命がどうなろうと構いません」

「ほお…愛する者を一人残しても構わないという覚悟が来ているのだね」

リシリーは、ジョージに寄り添うように立っているリリイに目を向けた。リリイは怯えた目をして体を震わせていた。

「それは…」

「…ジョージが死ぬなら私も死にます。私とジョージの命でこの国が救えるのなら、構いませんわ」

震えながらも真っ直ぐにリシリーを見つめて、リリイは答えた。

「愛の力というのは、強いものだな」

リシリーは冷たく笑う。

「だが、きれいな事を言うだけでは、何も解決しない。あなた方の命を奪ったところで何になる？　もう何人もの命が病で奪われている。

国を救うことなど出来はしないよ」

「そんな事ないわ。あなたは諦めてしまうの？」

黙って聞いていたエリーは、リシリーに詰め寄る。

「あなたが魔法を使わないのなら、私が魔法を使います！」

第二十五話（後書き）

読んで下さってありがとうございます。敬語の使い方が難しいです
：（^^;）間違ってるかもしれません。^^;^^;

第二十六話

エリーの言葉に、ジョージとリリイは驚く。

「エリー、どういう事?…」

「君は魔法が使えるのかい?…」

まじまじとエリーを見つめる二人を後目に、エリーは静かに口を開く。

「…私も魔法が使えるわ。まだ、習い始めたばかりだけど、少しだけなら使うことが出来るの。サムの病気は治療の魔法で治せたから」

「お嬢さん、自分の言っていることの意味が分かっているのかね? 君も魔法使いということになるのだよ」

顔色こそ変えていないが、リシリもエリーの発言に驚かされていた。

「魔法使いと言えるほど、私はまだ魔法を知りません。けれど、魔法を使えるのが魔法使いと言うのなら、私も魔法使いの一人です」

エリーはきっぱりと答え、リシリを見つめる。

「あなたの魔力があれば心強いですが…あなたが力を貸してくれないのなら、私一人でもやってみます。私はこの国が好きだから、この国を失いたくないです」

「……」

リシリはしばらく黙ってエリーを見つめ返す。

「…君一人の力では無理だよ。特に今はひどく疲れているようだ」

「でも」

「しばらくここで休んで待っていなさい。魔法は体力を消耗するものだ」

リシリは微かに笑みを浮かべ、静かに部屋を出ていった。

「……」

エリーは茫然として、リシリの出っていく様子を見守った。立っているのもやっとなくらい、エリーは疲れ切っていた。

（リシリー様はどうするつもり？私も処刑されるの？…）

エリーの胸に不安がよぎる。

（でも、その前にやるべき事があるわ）

ジョージとリリーの呼びとめる声を後ろで聞きながら、エリーも部屋を出ていった。

ダリルは一人牢屋のベッドに座っていた。二人の牢屋番も病に倒れ、今は誰も警備をする者はいない。ダリルのことは放っておかれるくらい状況は深刻になってきていた。

ダリルがぼんやりと視線を宙に浮かせていると、靴音を響かせて静かにリシリーが歩いて来た。ダリルは視線をリシリーに向ける。

「警備の手が足りず、あなたが牢屋番をすることになったのか？」

リシリーは牢屋の正面で立ち止まると、ダリルを見て静かに微笑んだ。そして、ゆっくりと牢屋の鍵を開けた。

「…裁判をすることなしに、僕の処刑を行うつもりなのか？」

「話をせかさずとも良い。今は君の力も必要だ」

「？……」

「さあ、出なさい、私の気が変わる前に。…残された時間はあまりない」

不審に思いながらも、ダリルは立ち上がり言われるままに牢を出た。

「エリー？」

二人の後ろにはエリーが立っていた。

「私の力は比べものにならないくらい小さいかもしれないけど、私も二人の力になります」

エリーは微笑みを浮かべて答えた。

第二十七話

「君は休んでいなさい。そう言ったはずだろう。そんな疲れ切った体では魔法は使えない」

リシリーは軽くため息をつく。

「全く、無茶なお嬢さんだ」

「私も力になりたいんです。黙って見ているだけなんて出来ない」

「彼女はダメだと言っても聞かないな。たいした力じゃなくても、いないよりはマシかもしれない」

ダリルは口元を弛める。

「…仕方ない。では、二人ともついてきなさい」

ダリルに何か言いたげなエリーを遮って、リシリーは足早に歩き始める。その後について行こうとしたエリーの腕をダリルは掴んだ。

「何よ？」

振り返ったエリーに、ダリルは懷から取り出した水晶球を握らせた。

「それを持っていると力が出やすい。僕には必要ないんでね」

ダリルはそう言って軽くウィンクすると、先に歩いて行く。エリーは水晶球を握りしめ後に続いた。

城の屋上には、冷たい風が吹き抜けていた。雨はもう止んでいたが、上空の空はどんよりと曇っている。ここからは国中が見渡せた。遠くに連なる山々、遙か彼方の地平線も見える。

エリーはダリルから渡された水晶球を強く握り、覚えたばかりの治癒の呪文を唱え続けていた。側にはリシリーとダリルも立って、一心に呪文を唱えていた。国中をまわり、一人一人治療している時間はない。国を見下ろす一番高い場所から魔法を唱える方法を、リシリーは選んだ。円形の魔法陣を描いて立ち、三人は心を一つにして 同じ呪文を唱える。

（どうか、どうかこの国に平和が訪れますように、暗い闇に光りが差しますように…）

エリーの額から汗が流れる。体力の限界はどうに超えていた。延々と続く呪文、気力だけでどうにか立っていた。時折、ダリルがちらちらとエリーに視線を送っていたが、ダリル自身もかなり体力を消耗していた。その横で、リシリーは微動だにせず静かに呪文を唱えている。リシリーの体からは強い魔法の波動が感じられ、その力は弱まることなく発せられていた。

長い時間が流れた。

（もう、ダメ…）

体中が痺れ、意識がもうろうとしてきた頃、エリーはふと心が軽くなるような感覚を覚えた。安らぎのような温かさが、全身を包む。その直後、空がグルグルと回転し始め、エリーは気を失ってその場に倒れた。

「魔法より大切なものがあることに…」

遠くの方で微かに声を聞き、誰かの温かい腕の感触を感じ体が持ち上がったような感覚を最後に、エリーの記憶はとぎれた。

第二十八話

穏やかな風が頬をなでていくような心地良い空気の揺れを感じ、エリーは目を覚ました。頭はまだぼんやりとしているが、体の疲れはとれていた。薄く目を開けると、リシリーの顔があった。

「気がついたかね。随分、気持ち良さそうに眠っていたね」

リシリーは口元を弛ませる。視線をずらすと、ジョージとリリーの顔もあった。二人とも幸せそうな笑みを浮かべている。

「：あ、魔法、魔法の続きを行わなくちゃ」

呪文を唱える途中で倒れたことを思い出し、エリーは起きあがろうとする。リシリーはそれを手で制した。

「もう少しばかり休んでいなさい。時期に日が暮れる、今夜は城に泊まると良い」

「でも：」

「エリー、もう良いのよ。魔法が効いたの。王様も元気になられたわ」

「君たちの魔法のお陰で、国中の人々が助かったようだよ」

「本当に？：」

まだ信じられない気持ちがあるが、確かにそれまでの暗く重い空気は感じられなくなっていた。

「君は無茶をするが、たいしたお嬢さんだ。あれだけの強い力を発揮出来るとは正直思っていなかった。君はもうれっきとした魔法使いだな」

「魔法使い：魔法を使ったことは許されるのでしょうか？」

エリーは少し不安になる。

「許されないとすれば、私と君とダリルは死刑ということになる。だが、国王はきっと許して下さるだろう。法律は早急に改正せねばならないな」

エリーの顔にようやく笑顔が戻った。

「リシリ様、ありがとうございます。願いを聞いていただけて感謝しています。：あなたのお気持ちが変わったのは何故でしょうか？」

「君達の熱意に負けたのだよ。この国一つ滅んだところで、どうにでもなると思っていたが、この国が滅びてしまうのは惜しい気になってきた。何より、将来有望な君とダリルという魔法使いを失うのはもったいない」

リシリは静かに微笑む。 エリーはふと気がつき、室内に視線を巡らせる。

「ダリルは？：ダリルはどこですか？」

「心配しなくて良い。彼は別室で休んでいるよ。あの後、倒れた君に治癒の魔法を使ったために、疲れが増したのだろう。自分を犠牲にしても守りたいものがあることに、彼も気づいたのかもしれない。それが本当の愛ということなのかもしれない」

「……」

エリーはリシリの言葉をかみしめ、そっと目を閉じた。ふわふわした豪華なベッドの心地よい温もりよりも、もっと心地よい心の温もりを全身で感じる。 愛する人達を失う恐れはなくなった。

サム、叔父さん、叔母さん、ジョージ、リリイ、そしてダリル、愛しい人々の顔を思い浮かべながら、エリーはもう一度安らかな眠りに落ちていった。

第二十九話

朝が訪れた。平和を取り戻した国に相応しい、明るくすがすがしい朝だった。目覚めたばかりのエリーは、部屋の窓を開け放った。新鮮な朝の空気が室内に流れ込む。昨夜は充分な睡眠をとり、頭はスッキリしていた。あんなに幸せな気分で眠れたのは、何日ぶりのことだろうか？城の下に広がる街並みと澄んだ青空を眺めながら、エリーは喜びをかみしめていた。と、部屋をノックする音がした。

「どうぞ、鍵は開いてます！」

窓辺に立ったまま振り返って声をかける。扉がゆっくりと開いて、ダリルが姿を現した。

「ダリル、具合はどう？」

昨夜は会わずじまいだったダリルに、エリーは笑顔を向ける。聞くまでもなく、元気そうな足取りでダリルは部屋に入ってきた。

「最高だね。こんな気持ちの良い朝を迎えたのは初めてだ」

ダリルは笑みを浮かべながら、エリーの隣りに佇んだ。

「美しい青空だ…」

ダリルが窓から空を仰いだ時、教会の鐘の音が街に鳴り響いてきた。鐘の音に国中の人々の喜びが込められているように、その音は高らかに空を舞う。

「本当に良かった。この国に平和が戻って…」

しばらく鐘の音に耳を傾けていたエリーは、ふと視線をダリルに向ける。

「昨日はありがとう。倒れた私にも治癒の魔法を使ってくれたのよね？そのせいであなたは具合を悪くしてしまったのね…」

「たいしたことないさ。あの程度で寝込んでしまうとは、我ながら情けないな。力不足を感じる」

視線を空に向けたままダリルは答えた。

「そんなことないわよ。この国に平和が戻ったのは、あなたとリシー様のお陰だもの。それに嬉しかった、すぐに助けてくれて。」

あなたはサムと私の命の恩人だわ」

ダリルは視線を空からエリーに向ける。

「……」

澄んだ緑色のダリルの瞳に間近で見つめられ、エリーは一瞬ドキツとする。　ダリルは無言のまま、エリーから視線を外そうとしない。

（やだ、何ドキドキしてるんだろう…）

エリーは軽く咳払いして俯いた。

「あの…私が倒れた時、あなた何か言っていたでしょ？…魔法がどうのこうの、よく聞き取れなかったんだけど、何て言ったの？」

「…さあ、よく覚えていないな」

ダリルは一瞬視線を泳がせたが、すぐに口元を綻ばせた。

「覚えているのは、抱き上げた君が予想以上に重かったことくらいだな」

「……！」

ロマンチックムードが崩れ去り、エリーはダリルを睨む。

「乙女心が分からない人ね。…さ、帰りましょうか。サム達に早く会いたいわ」

「そうだな。そろそろ僕もこの国を旅立たないとね」

「……」

ダリルの言葉に、エリーの心の中にある決心が膨らんでくる。

「サム！」

歩くのもどかしく、宿屋に駆け込んで行ったエリーの元に、サムが笑顔で走ってきた。

「エリー！」

サムはエリーの胸に飛び込んできた。エリーはしっかりと弟を抱きしめる。その後ろから叔母夫婦も姿を見せた。みんな元気そうだ。

「…エリー聞いたよ、魔法がこの国を救ったって。みんな噂している」

「ダリルのまほうがきいたんだ。あ、ダリル！」

サムはエリーの胸の中から離れると、後から入って来たダリルの元に駆けていく。

その様子を見ながら、叔母は微笑んだ。

「皆が生きていられたのも魔法のお陰だね。魔法に対する考え方を改めないといけないようだよ」

エリーは笑顔で頷く。

「叔父さん、叔母さん、大事な話があるの。少しいいかしら？」

最終話

それから数日後。

晴れ渡った空に、教会の鐘の音が鳴り響く。ジョージとリリーの結婚式は華やかに盛大に執り行われた。純白のウェディングドレスを着たリリーは美しく、誰よりも幸せに輝いてみえた。

式の後、エリーとダリルとサムは幸せそうな二人を出迎えた。既に旅の支度は整っていて、カラスと子猫も一緒だった。

「おめでどうリリー、すごく綺麗よ」

エリーは、ドレス姿のリリーを抱きしめた。

「ありがとう。…でも、しばらく会えなくなるのは寂しいわ。必ず戻ってきてね」

「ええ、その時は本物の魔法使いになっているから」

エリーはリリーから体を離して微笑んだ。

「そうね、エリーならきつとなれるわ」

「リリーはどこかの姫君のように美しい。僕は今リリーにプロポーズしたい気分だな」

横からダリルが口を挟む。

「ちよっと、何言ってるのよ…」エリーはダリルを一瞥する。

「だが、リリーには素晴らしいナイトがついているから、諦めるしかないな」

「そうだね。リリーがダリルと会う前に僕と会っていて良かったよ」

ジョージは笑って答えた。

「ジョージ、おめでどう」

エリーはジョージに視線を移し、軽く抱擁した。

「ありがとう。気をつけて行っておいで」

「ええ」

エリーは微笑んだ。もうジョージと普通に話が出る。エリーはジョージとリリーの幸せを心から祝福することが出来た。

「さて、そろそろ出発しようか。日暮れまでには次の国に着いていたいんでね」

ダリルはジョージとエリーのやりとりを見ながら口を開いた。

「一つの恋が終わった時、人は一つ成長出来る」

教会を離れ、国境近くの道を歩きながら、ダリルは呟く。

「こいつってどんなもの？」

ダリルの横を歩きながら、サムは質問する。

「説明するのは難しいな。サムもいずれ経験するだろう」

「ダリルはけいけんしたことあるの？」

「ああ、星の数ほどね」

ダリルはフツツと笑う。

「サムに変なこと教えないでね」

「エリーはこいをけいけんしたことある？」

「……」

無邪気な顔で見上げるサムに、エリーは口ごもる。

「一つの恋が終わった後、新しい恋が始まる、こともあるな」

「……」

ダリルはエリーを見つめると、いきなり頬に軽くキスした。

「！何よ？…」

「魔法より大切なものがあることに気がついた」

戸惑うエリーに、ダリルはウィンクして笑った。

「え？…」

「あ、ネコ、まって」

と、サムが抱いていた子猫が、腕から飛び降りて急に走り出した。追いかけるサムの後から、カラスもダリルの肩を離れてついていく。

「ネコって…あの子猫の名前なの？」

気を取り直して、エリーは聞く。

「ああ、まだ名前がなかったからね。僕がつけたんだ」

「ネコだなんて、そのまんまじゃない。カラスにネコなんて…もう

少し考えてあげてよ」

「なら、：ミシェル・マリー・エリザベート二世にしようか。第二候補だ、それとも」

「ネ、コ、でいいわ：」

ピシヤリとダリルの言葉を遮る。これからずっとダリルと一緒に旅を続けることに、少々不安を抱くエリーだった。少し先でサムがネコを捕まえ、エリー達に向かって手を振った。カラスはその上空を円を描いて舞ってる。様々な不安はたくさんあるが、エリーの心は期待で膨らんでいる。エリーは笑顔で手を振ると、サムの元まで駆けていった。

「フッ、鈍感なお嬢さんだな：」

ダリルはゆっくりと二人の方に歩いて行った。

国境の立て札が見えてきた。今、木の立て札には何も書かれていない。

ダリルはそれを見て、人差し指を軽く振る。と、そこには見る見る文字が浮かび上がってきた。

「ここよりノースウインドウ国

どなたでも侵入を許可する

特に、魔法使いは大歓迎」

ダリルは微笑むと、エリーとサムと共に国境を越えて行った。三人の旅は今始まったばかり： 完

最終話（後書き）

最後まで読んで下さった皆さん、ありがとうございました！どうか完結することが出来ました。途中、話の展開を変更したり行き詰まったこともありましたが、最後まで書き上げることが出来て良かったです。約三カ月間、ずっと頭の中にはこの物語があったので、終わってしまうとなんとなく寂しいです。いずれ、旅の話など書けたらいいなと思ってます。まずは、少しお休みして新しい物語を考えたいです。次回作もどうぞ宜しく！（へーへ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0957a/>

魔法使いのいない国 第二部

2010年10月8日14時45分発行